ようこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か

真埼　紳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ようこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か

【Ｎコード】
Ｎ１７５３Ｘ

【作者名】
真埼　紳

【あらすじ】
女性恐怖症である綾辻千尋が、それを克服すべく、いとこが経営する女学院へと、女子生徒として入学する。
女子だらけの学園の中で、千尋は男だとバレずに学院生活を続ける事ができるのか？　そして女性恐怖症は克服できるのか？
個性豊かなキャラたちが織りなすドタバタ学園コメディです。

第一話　華の麗香女学院

1

「俺は女だ……人が聞いたら突然何を言い出すのかと思うかもしれないし、こいつ頭がおかしいのか？　と思うかもしれない。だが、俺はすこぶる正常だ。別に心が崩壊した訳ではないし、俺にはそんな趣味はない。さっきの言葉が矛盾しているのは自分でもちゃんと分かっている。だが俺は女としてここにいなければならないのだ。なぜならここは……」

職員室を出て教室へと向かう。授業が始まっているからだろうか、廊下はひっそりと静まり返っていた。

「あ、あの……大丈夫、綾辻くん……あっ、じゃなかった、綾辻さん。ちょっと顔色が悪いけど……」

横にいた気の弱そうな女教師が話しかけてくる。黒縁のメガネの奥からオレを心配そうに見つめている。彼女の言うとおり、俺は今、気分が悪い。そりゃあ悪くもなるだろう。だって、女の格好をして実際に女学院の生徒としてこれから生活をしていかなければならないのだから……。原因は全て『あの女』にあるんだ……あいつが俺の人生を……。

幼い頃の記憶が脳裏をよぎる。俺の従兄弟であり、今はこの女学院の理事長である『広小路麗菜（ひろのこうじ　れいな）』による、思い出すのも忌々しい、あんなことやこんな出来事が頭の中を全力で駆け巡っている。

「綾辻さん、本当に大丈夫？」

担任である彼女、『春日由里絵（かすがゆりえ）』が突然俺の背中に手を触れた。

刹那、背中に悪寒が走ると同時に、身体が勝手に痙攣し始めた。

「さ、さ、さ、触らないでって言ったじゃないですか！　お、俺はじょ、じょ女性恐怖症だって説明したでしょう！」

思わず普段の言葉が出てしまう。次の瞬間、脳天に激しい痛みが走った。

突然襲われた痛みに目の前にはチカチカと星が飛んでいる。後ろを振り向くと、そこには、俺の天敵であるこの学園の理事長、広小路麗菜の姿があった。

腰の辺りまである、金髪とまではいかないが明るい色の巻き髪。ぱっちりとした二重まぶたの目と整った顔立ち。淡い紅色に彩られた唇は濡れたようにツヤツヤと輝いている。色白で透き通るような肌には何の欠点もない。まるでフランス人形のような可愛らしい顔をした女。これが俺のいとこである麗菜なのだ。

麗菜は金属バッドを床に着き、グリップに両手を置きながらゴミを見るような目で俺を見下ろしていた。

「千尋……あれほど気をつけろと言ったではないか。誰もいなかったからよかったものの……正体がバレて困るのはお前自身なのだぞ。もしもこの学園の女子生徒にお前の素性がバレたら、あんなことやこんなことを……いや、それだけでは済まんな。あんなところやこんなところまで……」

麗菜は卑屈な笑みを浮かべながら耳元で囁いたあと、俺の頬に軽くキスをした。

全身に一気に鳥肌が立つ。次の瞬間、身体が硬直した。俺はそのまま廊下に倒れ込んだ。その拍子に硬直が解けたかと思うと、殺虫剤をかけられたあとのゴキブリのごとく、手足を痙攣させながらもがき苦しんだ。

「きゃあっ！　綾辻さん、大丈夫！？」

慌てて俺に駆け寄る春日先生。それとは対照的に、麗菜は、金属バッドに両手を置いたまま、相変わらず俺を見下ろしている。

「大丈夫だ千尋……言葉遣いさえ気をつければ、今のお前はどこから見ても女子だ……女のような容姿に生んでくれた親に礼を言うんだな。さてと、私はもう行く。お前に付き合っているほど、理事長は暇ではないのでな」

金属バッドを左肩に乗せて歩いている姿はさながらジャイアンである。麗菜はそのまま理事長室へと姿を消した。俺は不屈の闘志で立ち上がると、近くにあったお手洗いへと立ち寄った。綺麗に掃除された手洗い場にある鏡を見つめる。そこにはこの女学院の制服に身を包む、栗色のサラサラヘアの美少女が映し出されていた。

2へ続く……

第二話　編入

2

ぱっちりとした瞳は、いとこである麗菜によく似ている。色白なところもそちらの家系のものを受け継いだのだろう。それにしても最近のウィッグはよくできているものだ。激しい動きの後でも、ずれてしまうことはないのだから……。

俺はこの変装に不備がないかをもう一度チェックしながら、あの時のことを思い出していた。

二週間前のこと……

「ああそうだ。いずれは女学院のひとつを千尋に任せようと思っている。だが……」

うちの屋敷に来ていた麗菜。親父の書斎に入ったままなかなか出てこない。もしかして中で何かエッチなことでもしてるのかと思い、こっそり聞き耳を立てていた。

ちなみに俺は女性恐怖症だが、女に興味がないわけではない。あの柔らかで丸みのある膨らみを触ってみたいという願望は普通の男子並にあるのだ。だが俺の体質がそれを邪魔して……。

「おじさまのお気持ち、お察しいたします。千尋があんな性癖をも

って生まれてしまったことで、おじさまも相当お悩みに……」

「性癖じゃねえよっ！　元はと言えばお前のせいだろうがっ！」

麗菜の暴言に思わず書斎の扉を勢いよく開く。

「千尋……全くお前という奴は。人の話を盗み聞きするとは。まさかお前、私がおじさまとエッチなことでもしているんじゃないかと思ったのではないだろうな？」

「ば、ばか、そんな訳ねえだろう。それよりもさっきの言葉、撤回しろ」

「何の話だ？」

「性癖のことだ性癖の！」

「ああ、そのことか。私は事実を述べたまでだ」

「あれは性癖じゃねえっ！　俺がまだ幼い時に、お前が俺にあんなことやこんなことやそんなことまでしたから、俺は女性に対して恐怖心を抱くようになったんだ。俺は被害者だっ！　責任をとれ、責任を！」

「男のクセにギャアギャアうるさい奴だ。今日はそのことでおじさまと話合いにきたのだ。お前はいずれ、女学院のひとつを任されることになる。理事長が『こっち』では笑い話にもならん」

麗菜は左の頬に、右手の甲をくっつけながら言った。

「そっちじゃねえ！　俺は女が怖いだけで女には興味がある」

「興味があっても身体がこれでは交わることもできまい」

そう言うと、麗菜は俺の手を取り、細身の身体には不釣り合いな膨らみに触れた。

「ぎゃあああああっ！」

俺の頭の中に幼い頃経験した、あんなことやこんなことやそんなことが走馬燈のように駆け巡る。背中に悪寒が走ったと同時に、恐怖で身体がブルブルと痙攣しはじめた。

「おじさま、見ての通りです。こんなことではおじさまの心が安まる時がありませんわ。どうでしょう。ここはひとつ、私に任せては頂けないでしょうか？　獅子は千尋の谷に我が子を突き落とすということわざがあります。ここはひとつ、千尋の女性恐怖症を治すために、我が女学院に編入させようと考えています」

「へっ？」

麗菜のその言葉の意味が分からなかった。

「どういういこと？」

「言葉の通りだ。お前を女の園で生活させる。要は慣れだ。女に囲まれて生活すれば、自ずとお前の恐怖症は治るという訳だ」

「何言っちゃってんの？　俺は男だぜ。女学院に編入できるわけないじゃん」

「大丈夫だ。問題ない」

「いやいやいやいやいやいや、問題だらけでしょ」

「バレなければいいのだ」

「バレるって、絶対バレるって！」

「四の五の言うな。もうお前を迎え入れる準備は進んでいる。あとはおじさまの許可を頂くだけだ」

「許可って……そんなこと許可する訳ねえじゃん。だって、女子校に男が通うんだぜ。バレたらただじゃ済まねえだろう」

「おじさま？　どうでしょうか？」

「うむ。許可する」

「ええええええええええええええっ！」

……と言うわけで、俺は女性恐怖症を治すために、麗菜が理事長をつとめる、この『麗香女学院』へとやってきたのだ。

これから俺は、この女学院にある寮で生活をしながら学院で学ぶことになった。

洗面所の鏡で全身をチェックし、そこを出る。担任の春日先生が

心配そうな目で俺を見ていた。

「大丈夫？」

「ええ、大丈夫です」

女の子口調で答える俺。麗菜が言った通り、女装した俺の姿はどこからどう見ても女の子だ。あとは言葉使いに気をつけるだけだった。

「それじゃあ、行きましょうか？」

「はい」

二人で教室へ向かって歩き始めた時だった。

「春日先生！」

突然、後ろから声がした。二人で同時に振り向く。そこには、にこやかな顔でこちらを見ている、黒髪の美少女の姿があった。

3へ続く……

第三話　学級委員

3

「あら加納さん、こんなところで何をしているの？」

担任である由里絵先生が、そこに立っている黒髪の美少女に話しかけた。

背中のあたりまで伸ばしたサラサラの髪は、余程手入れがされているのか、窓から差し込む日差しに照らされ艶やかに輝いている。廊下を抜けるそよ風に優しく揺られると、シャンプーの甘い香りがほのかに漂ってきた。

身体の線を如実に表すこの女学院の制服が、見事に均整のとれた彼女の身体を際だたせる。両手で輪を作ればその中に収まってしまうのではないかと思うほどに締まったウェスト。それとは相反し、目のやり場に困るほどに強調された豊かな膨らみ。ミニのスカートから延びる、真っ白でスラリとした生足。少女マンガに出てくる主人公の様にぱっちりとした瞳は少し潤み、廊下に差し込む日差しによって輝いて見える。どこを見ても欠点が見当たらない。

「先生があまりにも遅いので様子を見に来ました」

艶やかに煌めく薄めの唇から、可愛らしい声が放たれる。可愛いといっても「てへっ」っとか「きゃっきゃっ」といった感じの幼いものではない。落ち着きはあるが、どこか少女のあどけなさが残る、まあ言うなれば、可愛い女の子がいて、この子、どんな声をしているのだろう？　と自分の中で勝手な妄想を広げた後、実際に放たれ

た声を聞いて、「ああ、やっぱり想像通りだな」と思えるような、そんな声である。

「そうなの。ごめんなさいね、心配をかけてしまって……あ、紹介するわ。こちら、本日から2ーBに編入することになった『綾辻千尋』さんよ」

由里絵先生が俺のことを黒髪の美少女に紹介する。少女は俺の目をじっと見つめると、ニコッと天使の、いや天使以上の微笑みを見せた。その笑顔を見た瞬間、胸のあたりがキュンと疼いた気がした。

（何だこの感情は！　このフワフワした感覚……）

未体験の感情に戸惑う。だが決してイヤな感覚ではなかった。

（もしかして、もう女性恐怖症を克服したのか？　俺は千尋の谷を未だかつて人類が経験したことのない期間で駆け上ったのか？）

「私、2ーBで学級委員をしています、加納麻梨亜（かのうまりあ）です。これからよろしくね」

そう言うと、麻梨亜は右手を差し出してきた。握手を求めているようだ。

（ううっ……ここで拒否ればこの先ずっと気まずくなるよな……でも……でも……いや、大丈夫かもしれない。もしかしたら克服したかもしれないんだ。よ、よしっ）

「こ、こ、こちらこそ、よろしくね」

自分でも声が震えているのが分かる。俺は震える手で麻梨亜の手に触れた。

（あ、あれ？　大丈夫じゃん！　治ってるじゃん！　やったーっ！　やったーっ！）

心の中で歓喜の叫び声を上げる。麻梨亜の手をぎゅっと握ろうとしたが、意識が徐々に遠のいてゆくのが自分でも分かった。そして死力を尽くした末に勝利を勝ち取り、矢吹丈とお互いの健闘を称え合おうと手を伸ばす力石徹のごとく、握手を交わすことができないまま床へと倒れ込んでいった。俺は初日から保健室デビューを果たすこととなった。

どれだけ眠っていたのかそれすらも分からない。近くで何か気配がする。俺は恐る恐る目をうっすらと開いて見た。それと同時に、シュっとカーテンを閉める音がした。目を開けたときには、俺は白いカーテンで周りを囲まれたベッドの上にいた。

（やべえ……俺、また気絶しちゃったんだ。やっぱりそんなすぐに治るはずないんだよな……初日からこれじゃ、先が思いやられるぜ……あ、そうだっ！　俺、教室に行かないと。時間が開けば開くほど、教室に行きづらくなるしな。よしっ）

ベッドから起きあがろうとしたときだった。突然おでこに痛みが走る。痛みの場所を軽く指で触ってみると、その場所だけが少し膨らんでいた。

（痛ててっ、何だこれ？）

膨らんでいる部分を軽くなでこすり、状況を把握しようとしてい

ると、カーテンの向こうから、二人の女の子の声がした。

「ねえ、ここでしょう？」

「えっ、でもそこのベッドで誰か寝てるよ」

「大丈夫。今、確かめたけど、彼女、目を覚ます気配がないから。多分、花瓶に頭をぶつけた時に気を失ったのよ。保健の先生と春日先生、それに麻梨亜が、彼女が壊した花瓶の後かたづけをしてるし、今しかチャンスがないんだから」

「で、でも……」

「早くしないと先生が戻って来ちゃうわ。さあ、早く脱いで。私に見せてよ」

「で、でも恥ずかしいよ」

「もう！　じゃあ私が脱がせてあげる！」

「きゃあっ！　そんなに乱暴にされたら、制服が破けちゃう」

「ほら、腕を上げて……」

「う、うん……」

「……」

「……」

「わあっ！　美嘉っ、いいっ！　すごく綺麗よ」

「そんなに見ないで……恥ずかしい」

「ふふっ、可愛い。こんなに硬くなってる」

「やだっ、そんなこと言わないで。そんなこと言われると……もっと硬くなっちゃう」

「ねえ、早くしましょ」

「ああん、そんな、急に後ろから……いやんっ、真緒のおっぱいが背中に当たってる。恥ずかしいよぉ」

「やあ～だ～あ～すごく柔らかいじゃない」

「ああん、真緒、後ろからそんなに強くされると私……いやあん、乱暴にしないでぇ」

（えっ！　えっ！　ええっ！　こ、これってまさか……いや、話には聞いたことがある。女子校では結構多いって聞いたよな。でも実際にカーテンの向こうでそんなことが行われているなんて！　マジかよっ！）

くどいようだが、俺は女性に触れられるのが怖いだけであって、決して女性が嫌いなワケではない。もちろん、一般男子のように、こういうシチュエーションでは、ちゃんとした生理現象を起こすのである。

俺は息を殺してベッドから降りると、カーテンの隙間からその向こうで繰り広げられている禁断の〇〇を覗こうとしていた。

白いカーテンに指を掛ける。そーっとそれをスライドさせる。俺は目の前で身体を重ねている二人の姿に言葉を失っていた。

４に続く……

第四話　保健室で

4

肩ぐらいまでありそうな明るい栗色の髪をポニーテールにした女が、美嘉と呼ばれる女の背中に胸を押しつけるように乗っている。

「真緒……ちょっと痛いよ」

「我慢しなさい。もう少ししたら気持ちよくなってくるから」

真緒と呼ばれるポニーテールの女は、保健室にはそぐわないレオタード姿の美嘉に、さらに覆い被さるように身体を預けた。

「いやああん、痛いよぉ。もっと優しくして！」

床で両足を開き、背中を真緒に押された美嘉の身体。豊かな膨らみが床に押さえつけられ、柔らかく形を変えている。ぴったりと身体に張り付くレオタードが彼女の豊かな膨らみを余計に強調している。

「いやあん、何かエッチ」

美嘉の姿を見て真緒が後ろから胸の方へと手を回す。

「やだあ、おっぱい触らないでよ」

目の前で繰り広げられる乙女たちの禁断の行為に、思わず唾を飲み込む。その音が思いのほか大きかったのか、はたまた、俺が何や

ら怪しいオーラを出していたのか、突然真緒が後ろを振り返る。ぱっちりとした瞳の真緒と目が合った。真緒はニヤリと笑うと、突然カーテンを素早く開いた。

「あ、あわわ……」

緊急事態に言葉が出ない。

「こっそり見てたでしょ、私たちのこと」

真緒がベッドに手を突き、俺の方へと身体を寄せてくる。

「もしかして、あなたもこっちなの？」

口元に妖しい笑みを浮かべながら、真緒が俺の胸へと手を伸ばしてきた。

真緒の手が胸に触れた瞬間、俺の頭に幼い頃に麗菜によってあんなことやこんなことや、そんなことまでされた記憶が蘇って……こない？

（えっ、どうしてだ？）

「あら、嫌がらないってことは、やっぱりあなたもこっちなのね。嬉しい！」

そう言うと、真緒が俺の首に腕を巻き付けながら、突然唇を奪ってきた。その瞬間、俺の頭の中に幼い頃、麗菜によってあんなことやこんなことや、そんなことまでされた記憶が蘇って……くるっ！

俺の身体は硬直し、小刻みに痙攣を始める。

「きゃあっ！　どうしたの？！」

慌てて俺をのぞき込む真緒の顔が次第にかすれてゆく。俺の意識はそのまま遠のいていった。

目が覚めると、俺は保健室の天井を見上げていた。

「あら、気がついたかしら？」

俺の顔をのぞき込む大人の女性が目の前にいる。肩まである黒髪はウェーブしている。真っ赤に彩られた薄い唇。顎の右側のホクロが何とも艶めかしい。赤縁のメガネの奥に見える切れ長の瞳が、俺をじっと見つめていた。

「ぉ、俺……いやっ、私、一体どうしちゃったのかしら……」

「ふふふ、ここでは隠さなくてもいいわよ。この女学院の教師たちは、みんなあなたの正体を知っているから。ここにいるときぐらいリラックスしなさい」

「そ、そうなんですか……良かった……編入早々に退学しなきゃいけないと思ってしまいました」

俺が言うと、彼女はニコリと笑った。大人の女性の魅力に思わずドキッとする。クドいようだが俺は女性に触れられるのが怖いだけであって、女性に興味がないわけではない。

「あれ、さっきの子たちは？」

保健室には白衣を着てイスに座っている彼女の他に誰もいなかっ

た。白衣には『校医　水島』と書いてあった。

「ああ、結城さんなら教室に戻したわ。彼女のお友達が昼から競技会があるらしくて、ここでストレッチを手伝っていたんですって。まあ、本当はお友達のレオタード姿が見たかったんでしょうけど……彼女、男の子には興味ないみたいだし」

「や、やっぱり……ぁ、そう言えばひとつ不思議なことがあったんです。彼女が俺の胸に触れたとき、俺、いつもみたいに卒倒しなかったんです。何でなんだろう……」

「ふふっ、教えてあげましょうか？」

水島先生はイスから立ち上がると、俺の耳元でそっとそんな言葉を囁いた。彼女からほのかに漂う香水の甘い匂いが鼻をくすぐる。そう言ったあと、彼女は俺が着ている制服を胸の上まで捲りあげた。

ピンク色の下着が露わになる。彼女は口元に妖しい笑みを浮かべながら、下着を胸の上へと一気にずりあげた。

ずれた下着の隙間から、プルプルとした物体が落ちる。彼女はそれを手に取ると、俺の前に晒した。俺が女装のために使っている、胸を大きく見せる道具が彼女の手のひらでプルプルと揺れていた。

「直接触られたワケじゃなかったからよ。でも気をつけなきゃだめよ。周りは女の子だらけなんだし、今みたいにここがこんな風になってたら、すぐにバレちゃうわよ」

水島先生が耳元で囁くように言ったあと、股間を指さす。クドいようだが俺は女が嫌いなワケではない。

「さてと……目が覚めたようだし、春日先生に連絡しておいたから。みんなにバレないように気をつけなさいね。特に今日は……ねっ。それと、後で必要になると思うから持っていきなさい」

水島先生はウィンクをしながら意味深な言葉を吐いたあと、俺に何かが入ったビニールの袋を渡した。と同時に、保健室の扉が開き、担任教師の春日由里絵がやってきた。今の時間、２ーＢは由里絵が受け持っている国語の授業中だったのだ。

「私が受け持っている時間でちょうどよかったわ。綾辻くん……あっ、綾辻さんのこと、みんなに紹介するわね」

俺たちは保健室を出ると、２ーＢの教室に向かって歩き始めた。

階段を上り三階に着く。一直線に伸びる廊下には、四クラスある二年生の教室のほか、美術室や理科室などといった特別教室が並んでいる。２ーＢの教室は、廊下を真っ直ぐ進み、突き当たる一つ前の教室だった。

２ーＢの教室の前まで来た。教師がいないからか、教室の中は騒がしかった。

「全く、あの子たちったら……」

由里絵が教室の扉を開き、中に入る。すると騒がしかった教室内が静かになった。

「ちょっと遅れたけど、新しいお友達を紹介します」

生徒たちに向かって由里絵が言った。

「さあ、入って」

由里絵に促され教室に足を踏み入れる。入った途端、俺が通っていた男子校とは全く違ういい匂いが教室に漂っていた。

由里絵が黒板に俺の名前を書く。

「今日から私たちと一緒に過ごすことになりました、綾辻千尋さんです」

そう言うと、由里絵が俺に向かって目配せをした。どうやら自己紹介をしろと言っているようだった。

教室を見渡す。当たり前だが教室の中は女子だらけだった。みんなの視線が俺に突き刺さる。その中に、加納麻梨亜や、結城真緒の姿もある。麻梨亜は俺と目が合うと、ニコリと優しく微笑んだ。

「えっと……今日からこの女学院に……」

キーンコーンカーンコーン

俺が自己紹介を始めたと同時に授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。生徒たちが一斉に教科書とノートを片づけ始める。何かとても急いでいる様子だった。

「あっ、そうだった。次の時間は体育だったんだわ」

「えっ？　体育？」

先ほど保健の水島先生から受け取ったビニール袋を開けてみる。中には赤い上下のジャージが入っていた。

「か、春日先生……次の時間って体育なんですよね」

「そうよ。体育の森山先生は遅刻するとウルサいから、綾辻さんも早く着替えなさい」

「ど、どこで着替えるんですか？」

「どこって、もちろん更衣室に決まってるじゃ……あっ」

俺たちはお互い見つめ合ったまま、その場で固まっていた。

5へ続く……

第五話　更衣室

5

「あっ……えっと、私、数学の松本先生に呼ばれていたんだったわ……さよならーーーー！」

「あっ！　逃げたっ！」

担任の春日由里絵は俺の前から逃げ出した。いきなり体育なんて聞いていない。女の子たちの前で着替えて、俺が男だとバレたらどうするんだ？　麗菜はこういう事態になることを考えなかったのか？　まあ、俺も今、初めて気づいたのだから人のことは言えないが……。

どうしようかと戸惑っていると、俺はあることに気づいた。

（そうだ、そうだよ。下着を取らなければ問題ないじゃないか。壁に向かってこっそりと、そして素早くジャージを着ればバレることはないのではないか？）

素晴らしい思いつきにホッと胸をなで下ろす。

胸？

俺は制服の胸元から中を覗いてみた。そしてある欠点に気づく。安堵の息はため息へと変わった。

（下着を取らなくてもこれじゃあバレるじゃねえか……）

下着の中に忍ばせたパッドのおかげで胸の膨らみはある。だが谷間が全くない。これではあまりにも不自然な膨らみである。

（どうすんだよ。絶対バレるよ……）

教室で一人悩んでいると、突然扉が開いた。

「ああ、やっぱりまだいたのね」

学級委員の加納麻梨亜が慌てた様子で教室に入ってきた。

「ごめんね。綾辻さんはまだこの学院のこと知らないんだもんね。私ったらそんなことに気づかないなんて、学級委員失格だわ。さあ、こっちよ。急ぎましょう！」

麻梨亜が廊下に出て俺を手招きする。俺にはもう迷っている時間はなかった。

水島先生から受け取った、ジャージの入った袋をもって廊下に出て、先導する麻梨亜の後を追いかける。窓から見えるグラウンドと体育館がどんどん遠ざかってゆく。

（ん？　更衣室ってやけに離れた場所にあるんだな）

この女学院の中はまだよく分からない。違和感を覚えつつも、俺は麻梨亜の後を追った。

階段を下りてゆく。俺たちはそのまま地下へと下りていった。

（そうか。地下で繋がってるのか。なるほど！　ここは女学院。外から女子高生の体操服姿を盗撮する輩がいるとも限らない！　だからなるべく外部とは接触しないように、地下道を造っているんだな……）

生徒のみならず、職員や教師全てが女子であるこの麗香女学院。自分たちの身は自分たちで守ろうということなのだろうか。長い地下道を二人で駆けながら、俺たちはようやく更衣室にたどり着いた。

「さあ、早く着替えちゃいましょう。泳ぐ前に準備運動をしないといけないから、いつもよりも時間がないのよ」

そう言いながら麻梨亜が更衣室のドアを開けた。

（ん？　いま何かとんでもないことを言っていたような気がするが、気のせいか？）

ドアを開けて少し右に折れる短い廊下を通って奥に入る。麻梨亜に続いて更衣室に入った俺は、目の前に広がる光景に開いた口がふさがらなかった。俺は目の前の眩しい光景に身をのけぞらせる。

（マジか？　マジでこうなのか？）

壁に頭を強打した俺の意識は徐々に遠のいていく。心配そうに駆け寄る麻梨亜の顔が、だんだん霞んでいった。

……

……

…

気づくと俺は保健室の天井を見上げていた。

「あら、気がついた？」

保健の水島先生が、俺をのぞき込んできた。

「水島先生……俺、いったい……」

「顔がニヤケていたけど、いったいどんな夢を見てたのかしら？」

「えっ……俺、何か言ってましたか？」

「ええ。おっぱいがいっぱい、おっぱいがいっぱいって何度も口に出していたわ」

水島先生の言葉を聞いたあと、顔が熱くなっていくのが自分でも分かった。

「それよりも困ったことになったわね……今日は運良くあなたが気を失ったからよかったものの。今月はずっと水泳の授業があるらしいわ。何でも体育の森山先生が、世界水泳の中継を見て感化されたらしいわ。この間はワールドカップを見てサッカー漬けになったみたいだし、その前は野球でしょう……森山先生には困ったわね。この先、あまり体育を休むと生徒たちに怪しまれてしまうわ。一度理事長に相談してみてはどうかしら？」

水島先生の言うとおり、あまりにも特異な行動をとれば女の子たちに怪しまれてしまう。ここにいる限りはあくまで普通の女子高生として過ごさなければならないのだ……だがそれをするにはクリアーしなければならない根本的な問題があるのだ。

保健室を後にした俺は、その並びにある職員室へと向かった。扉を開けた瞬間、担任の春日由里絵と目が合った。彼女は気まずそうな顔をしたあと、すぐさま俺から視線を逸らした。

職員室を奥に進み、校章であるユリの花を象ったエンブレムのついている理事長室の扉をノックする。

「誰だ？」

中から麗菜の気だるそうな声がした。

（何だよその眠たそうな声は。よくこれで理事長が務まるな……）

「綾辻です」

「千尋か。入れ」

扉を開けて中に入る。すると麗菜がこちらに背を向けながら、机に向かって何かをしていた。

「そろそろ来る頃だと思っていた」

こちらを向きもせず、麗菜が言った。俺は後ろ手で扉を閉めた。

「話をするときぐらいこっち向けよ。失礼な奴だな」

麗菜に文句を言いながら机に近づく。そのとき、俺はとんでもない光景を目の当たりにした。

理事長室の机の上に、全裸の女性が横たわっていた。それだけでも驚くには事欠かないのだが、俺を絶句させたのは、その女性は首から上が存在しないのだ。首の近くには割れたグラスの他に、室内の照明に照らされてキラリと光るノコギリがあり、ダークブラウンの机の上には真っ赤な血だまりができていた。それが机の端まで流れ、そこからポタポタと血が床へと滴り落ちている。

麗菜は振り返ると、ニヤリと口元を歪ませながら怪しい目つきで俺を見つめていた。

6へと続く……

第六話　理事長室

6

理事長の机の上にある女性の遺体を見て、思わず腰を抜かした。

麗菜は机の上にあったノコギリを手にとると、俺の方へと振り返り、動けないでいる俺に向かってジリジリと近づいてきた。

「く、来るな人殺しっ！」

麗菜は右手にノコギリを構えると、それを俺に向かって一気に降り下ろしてきた。

次の瞬間、ギコギコと何かを切る音が聞こえてくる。

（ぎ、ぎゃあああああ！　俺の首の骨がっ！）

首を両手で押さえながら床に倒れる。麗菜は俺の後ろにあった観葉植物の枝をいつの間にか切り落としていた。

「そこで何をもがいているんだ？」

切り取ったフサフサの葉がついた観葉植物の枝で、机の上で割れていたグラスとその破片を集める。ゴミ箱にそれらをポイすると、ついでにその葉っぱで、机の上の血だまりを散らかした。その滴が俺の口の中へと飛び込む。鉄の味が口いっぱいに広がら……ない。よくよく味わうと、トマトジュースの味がした。

麗菜は黒革張りの椅子に座り、ふん反りかえると、遺体を前にしながら語り始めた。

「さて……お前がここにやってきたのは予想がついている。大方、普通の体育の授業かと思って、安易な気持ちで更衣室に向かったが、実は急遽、水泳の授業になり、おっぱいだらけの環境の中で卒倒してしまった挙げ句、こんなことになるのは予め予想がついていただろうに、麗菜は全く何の対策もしないで俺を女学院に編入させやがった、これから一体どうするつもりだ、と私に文句を言いに来たのだろう？」

麗菜の推理があまりにも完璧すぎて、ツッコむタイミングを逃してしまう。

「ど、どうしてそれを！」

俺にはこの言葉を言うのが精一杯だったが、

「当然だ。お前に盗聴器を仕掛けておいたのだからな」

という言葉に納得する。

「それなら話は早い。これから一体どうするつもりなんだ？　この先、逃げられない状況がきっとあるはずだぜ」

俺の言葉に、麗菜がふんっと鼻で笑った。

「それなら問題ない。この遺体にお前の首を付け変えて……おい、そんなに引くな。冗談に決まっているだろう。これは私が開発した、リアル女体スーツ『北極三号』だ。これを着ればお前の体は誰だど

う見ても女に見える。さあ、試しにこれを着てみろ」

麗菜はそういうと、女体スーツを俺に向かって放り投げた。女体スーツは驚くほど軽い。何の素材でできているのかは分からないが、手触りは人間の肌と変わらなかった。素材に興味があったが、「本物の人の……」と言われたら怖いので、あえてそれは聞かないことにした。

制服を脱ぎ、パッドの入ったブラを外し、とりあえず下着一枚になる。俺はリアル女体スーツ『北極三号』を着てみた。

着ると女体スーツがスーッと身体に馴染んだ。一体どういう仕組みになっているだろうか。人類の英知を越えた麗菜の発明に驚かされるが、どうやってこれを作ったのかを聞くのが恐ろしい。「実は私は遠い宇宙からきた……」などを言われても困るので、これもあえて聞かないようにした。

麗菜は昔からこうなのだ。彼女は海外の某有名大学を首席で卒業した。しかも十二歳という若さでだ。その後、様々な分野に足を突っ込み、あらゆる分野で名声をあげた。

そんな彼女がなぜ女学院の理事長をしているのか？　その理由を先日、俺をこの女学院に編入させるという提案の席で知ることになる。彼女は俺の女性恐怖症を克服させる為に理事長になったというのだ。

俺が女性恐怖症になったのは、麗菜のせいである。俺がまだ幼い頃に、麗菜によってあんなことやこんなことや、そんなことまで……と、これはもう何度も言っているので割愛するが、麗菜は麗菜なりに責任を感じてしまったのだろう。

俺が涙を浮かべて礼を言おうとすると、『それは表向きの理由で、千尋に女装させて女学院で生活させるのが、なんか面白そうだったから』と本音をもらしやがった。

「どうだ？　どこからどう見ても女だろう？」

理事長室にあった鏡で全身を映してみる。麗菜の言うとおり、自然な膨らみもあるし、ちゃんと毛も生えている。

「見た目だけではない。このスーツがあれば、ある現象も抑えられるのだ。今からそれを試してやる」

そう言うと、麗菜は机の上にあった電話で誰かを呼びだした。少し間があいて……

「失礼します」

ノックのあと、担任の春日由里絵がうつむきながら部屋に入ってきた。そして後ろを向きながら扉をしめた。

「あの、何かご用です……か」

顔を上げた由里絵が言葉に詰まる。彼女は全裸で立つ俺を見て目を丸くした。

「な、な、な、な、な、何をしてるんですか？」

顔を真っ赤にしながら麗菜に尋ねる。

「何を照れている。お前は千尋が男だと知っているだろう？　これは作りものだ」

由里絵は「あっ」っと合点がいったようだった。

「それにしてもよくできていますね。私、本当に裸の女の子が立っていると思ってしまいました。理事長はこれを見せるために私を呼んだのですか？」

「いや、そうではない。春日先生。ここに立ちなさい」

「えっ？　ここですか？」

俺の前に由里絵を立たせると、麗菜は後ろから彼女の服の裾を持つと、ブラのカップに指をかけつつ、それを胸の上まで一気にめくりあげた。

ぷるんっ！

と、音がしそうなほど大きな乳房が大きく揺れる。

「きゃあああああっつ！」

突然の出来事に由里絵は悲鳴を上げる。俺の目は彼女の胸にくぎ付けになった。

「ふふふ、どうだ千尋。彼女のおっぱいを見て興奮しても、それが全く分からないぞ」

麗菜に言われて股間に視線を落とす。彼女の言うとおり、男なら

ば必ず起きる生理現象が、リアル女体スーツ『北極三号』によって押さえつけられているのだ。

「ふふふっ！　見たか私の実力を。だがスゴいのはこれだけではない。指でこうやっていじると……」

麗菜が女体スーツの胸の先っぽを指でいじる。

「なんと！　ちゃんと乳首が硬くなる」

理事長室の棚になぜか置いてあったハリセンで、麗菜の頭を思わず叩く。小気味よい音が理事長室に響いた。

数分後……

「だ、大丈夫？　綾辻君……」

由里絵に身体を起こされ、ティッシュで鼻血を拭ってもらう。身体に彼女の手が触れているにも関わらず卒倒しない。

「あれ、何でだ？　身体を触られているのに……いつもとは違う」

俺が戸惑っていると……

「当然だ。直接肌に触れられているわけではないからな。この『北極三号』は、そういったことを防ぐ役割もある。それなのにお前というやつは……だいたいお前は昔から……」

さっきのハリセンをまだ根に持っているようだ。昔の話まで持ち

出し俺に文句を言ってくる。半殺しにされた俺は由里絵に手を借りて立ち上がった。

「早く女子寮へ行け。お前の恐怖症が早くなおるように、私が適任な生徒を選んでおいた。ルームメイトとは仲良く過ごすんだぞ。色々な意味でな……」

麗菜は意味ありげな言葉を吐いたあと、理事長室から出ていった。

7へ続く……

第七話　女子寮

7

担任の春日由里絵に案内され、俺は女学院のすぐ隣にある学生寮『百合の園』の門の前に立った。名前からして何やら女子めいた雰囲気である。

女子寮は煉瓦調の外観をもつ古びた洋館だった。赤褐色の壁にはツタが絡み、中庭には白いテーブルが幾つか置かれている。洋館の周りには薔薇の生け垣がある。いっそのこと、名前を『薔薇の園』に変えた方がよいのでは、とツッコミを入れてしまいそうになるほどに薔薇が咲き誇っていた。

洋館の入り口は重厚な木製の扉になっている。

「綾辻君……出して」

（出す？　何をだ？　今の俺に出せるものといったら……）

制服をベロリとめくり、とりあえずおっぱいを出してみる。

「ち、違います！　学生証を出すんです！」

由里絵は慌てて制服の裾を持ち、俺の胸を隠した。そして編入してきたときにもらったパスケースの中からカード型の学生証を取り出す。

「ここにかざして」

ドアの横にある小さな機械にカードをかざしてみた。ピッと電子音がした後、ドアの向こうでロックが外れる音がした。意外とセキュリティはしっかりしている。古いのは外観だけのようだ。

ドアを抜けて中に入る。ホールには南国のフルーツのような甘い香りがほのかに漂っている。二階までの吹き抜けになっていて、建物をぐるっと囲むように廊下があり、そこにそれぞれの部屋の扉がある。廊下に出れば、どこの部屋からでもホールが見える作りだ。逆も然り。ホールからどの部屋の扉も見えるようになっていた。

ホールの中央へと歩を進める途中で、俺は何か違和感を覚えた。ゆっくりと後ろを振り向く。右斜め後方に、何やら小さな窓があった。

身体は前を向いたままで後ろへと二歩戻る。窓の前で立ち止まる。そこには老婆が一人座っていた。

（あ、この寮の管理人のおばあさんなのかな……これからこの寮でお世話になるんだから挨拶しておかねば……）

小さな窓を横にスライドさせた俺は、椅子にちょこんと座る小さなおばあさんに声を掛けた。

「あの、今日からお世話になります、綾辻千尋と申します。これからよろしくお願いします」

なるべく女の子らしくしようと、首を右に少し傾けながらにこりと笑う。

「……」

だがおばあさんは無反応だった。

（耳が遠いのかな？）

「あのーーーーっ！　今日からお世話になりますーーー、綾辻千尋でーーーす」

大きな声で言ってみた。だが結果は同じだった。それどころかおばあさんは先ほどから微動だにしない。

「ん？　もしかして人形なの？　一応形だけ管理人が居ますよってことにしてるんですか？」

横にいる由里絵に尋ねた。

「生きとるわ！」

突然人形がしゃべりだした。

「わっ！　びっくりした！」

「話は理事長から聞いておる。部屋は二階の２０４号室じゃ。理事長もお前さんとあの子を同じ部屋にするとは……くくくっ……せいぜい仲良くするんじゃな……いろんな意味でのぉ」

麗菜と同じく、意味深な言葉を吐く老婆。俺はなんだか背中のあたりがゾクゾクするのを感じていた。

管理人のトメさんに部屋の鍵をもらった。二階へと続く螺旋状の階段に足を掛けると、俺に向かって由里絵が声を掛けた。

「じゃ、じゃあ、私はこれで……さよならーーーー！」

「あっ、春日先生！」

由里絵の『さよならーーー！』が出たときは、何か都合が悪いときだと、俺は学習していた。イヤな予感を抱きつつ、俺は二階へと続く階段を上った。

廊下には赤い絨毯が敷かれている。フワフワとした感触の床を歩きながら、扉にあるプレートを見た。

シックな色合いの木製のドアだ。よほど手入れがされているのか、扉はワックスを掛けたように艶がある。真鍮のドアノブの下に鍵穴があり、鍵はドアノブと同じ材質でできている。クローバーをモチーフにした持ち手から、五センチほどの細い胴体があり、先端にレレレのおじさんの歯のような、隙間が開いた二つの突起が並んでいた。

「２０３……２０４、あった、ここか」

２０４のプレートが掲げられた扉の前に立つ。その扉を見たとき、俺はある違いに気がついた。

他の部屋の扉はツヤツヤと輝いているのに、この部屋の扉は艶が全くない。何年も使っていないような、そんな廃れた感があるのだ。俺は鍵穴に鍵を差し込むと、それを反時計回りに回した。

カチャ……

鍵が開く音がする。どこか冷たい雰囲気。真鍮のドアノブに手を掛けると、ノブを回して扉を開けた。

ギィィと扉が軋む音がした。次の瞬間、冷たい風が頬を撫でる。

（ひいっ！）

思わず肩をすくめてしまった。

恐る恐る部屋の中に足を踏み入れる。すると突然、扉がバタンと大きな音を立てながら勝手に閉まった。

後ろに誰かいる気配がある。俺は恐る恐る後ろを振り向いた。そこには、長い黒髪を顔の前に垂らす、一人の女の子の姿があった。

８へと続く……。

第八話　ルームメイト

8

女の子の髪が前に垂れて入るので、彼女の顔を窺い知ることができない。

「こ、こ、こんにちわ」

とりあえず挨拶をしてみるが、彼女はうつむいたままだった。

「あ、あの……今日からあなたと同じ部屋で生活をすることになった『綾辻千尋』です……あ、あなたの名前は？」

「……です……」

『です』だけ聞こえたような気がした。

「えっ？」

もう一度聞き直す。

「レイです……」

彼女は相変わらずうつむいたまま、蚊の鳴くような声で言った。

「れ、レイさんですか……に、二年生ですよね？」

「……一応、そう言うことになりますかね……」

何か意味ありげな言い方をする。ちょっと変わった子のようだ。
「あの。顔を上げてもらってもいいかな？　ルームメートなんだし、あなたの顔を見てみたいの」
「……私……ブスだから……」
「そ、そんなこと言わないで見せてくれないかな？」
「……笑いませんか？」
「わ、笑わないよ」
「本当に？」
「ほ、ホント、ホント」
「じ、じゃ……少しだけ……」
彼女はそう言うと、うつむいたまま、両手で髪をかき分けた。
「本当に笑いませんか？」
（……く、くどい……）
「大丈夫よ……笑ったりしないから」
俺は無理矢理笑顔を作りながら言った。

「分かりました……あなたを信じます……」

そう言うと、彼女はゆっくりと顔を上げた。さっきまで髪で隠れていた彼女の顔が露わになる。

「……」

彼女の顔を見た瞬間、全ての動きが止まった。

可愛いのだ。

俺が見た女子の中で一、二を争うほどに……。

ぱっちりとした二重まぶたが印象的である。小顔の割に目が大きいので、目が異様に大きく見える。まるで少女マンガの主人公のような瞳をしていて、とても澄んでいる。目を合わせるとその美しさに吸い込まれそうになってしまう。

鼻はわりとこぢんまりしていて筋も通っている。唇も程良いプックリ感がある。透き通るような肌をしていて、ブスどころか、めちゃくちゃ可愛い女の子だった。

「やっぱり見せるべきではありませんでした……」

俺の反応を見て、彼女は落ち込んだように再びうつむいた。

「う、ううん、違うの！　レイさんがあまりにも可愛いからつい見とれちゃったの」

「……本当ですか？」

「……本当よ」

「……本当に本当ですか？」

「……本当に本当です」

「最高ですか？」

「さいこう……ん？」

何か昔、テレビで見たニュース映像が頭をよぎった。

「レイちゃんは本当にブスじゃないわ。私が保証する。だからもっと自信を持って顔を上げてよ」

俺が言うと、彼女は再び顔を上げた。

「ほら、やっぱり可愛い」

俺の言葉に彼女が少しはにかんだ。照れながら笑うその顔が本当に可愛い。

「これからルームメイトとしてよろしくね」

ニコリと笑顔を見せて言う。本来ならここで手を出して握手なり、ハグなり、コロ助なりをするのだろうが（最後のやつは全く関係ないが……）、そこは女性恐怖症の俺（厳密には、女性に触れられると過去の記憶が蘇り、身体に変調をきたす）なので、そこは敢えて

笑顔だけですませておいた。

ルームメイトであるレイへの挨拶を済ませると、俺は改めて部屋の中を見回してみた。

薄暗い部屋の中にはロフトベッドが二つ、両側の壁にぴたりとつけられ置かれている。ベッドの下のスペースが机になっていて、そこで勉強ができるようになっていた。

各部屋にトイレとバスがあるのは有り難かった。いくらリアル女体スーツ『北極三号』があるとはいえ、極力、裸で女子と交わることは避けたい。部屋でお風呂に入れるのは俺にとっては好都合だった。

ふとレイの使っているロフトベッドに目が留まる。布団はホテルの客室係が施してくれたのかと思うほどベッドメイクは完璧で、机にある辞書や教科書やノートもまるで使っていないのではないかと思うほどにキチンと棚に収まっている。そこからレイはとても几帳面な性格なのだなということが分かった。

レイのベッドの向かいにある俺の机に荷物を置くと同時に、部屋の中にチャイムが響いた。

「えっ？　このチャイムは何？」

学校内ではないにも関わらず、チャイムが鳴る。不思議がっていると、

「今のは夕食を知らせるチャイムですよ。夕食は寮生みんなで取るのが決まりなんです」

部屋の壁に掛かっている時計を見た。針は１８時を指していた。

「もうこんな時間なんだ」

「先に行ってもらえますか？　私はちょっと……」

「あ、うん、分かった。じゃあまた後でね」

レイを部屋に残し、俺は部屋を出た。

「あっ、綾辻さん」

階段を下りていると、後ろから声を掛けられた。振り返ると加納麻梨亜がいた。

「あ、加納さん。あなたもここの寮生だったの？」

「うん。そうよ。綾辻さんはまだ寮の中を知らなかったわよね。食堂はこっちよ……それから、これはちょっとお願いなんだけど聞いてくれるかな？」

「ん？　何かしら？」

「綾辻さんって呼ぶのも何だか堅苦しいから、千尋ってよんでもいいかしら？」

「ええ、もちろんいいわよ」

「本当？　じゃあ私のことも麻梨亜って呼んでね」

「うん、分かった。じゃあ麻梨亜、早く食堂に行きましょう。私、もうおなかペコペコ……ねえ、どうでも良い話しだけど、何でおなかが減るとペコペコって言うのかしら……」

「えっ？　何でだろう……でも千尋って結構変なことを気にするのね」

クスクスと笑う麻梨亜。俺はその笑顔に胸のあたりがまたキュンとうずいた。二人で談笑しながら食堂へと向かった。

食堂には長いテーブルが二つあった。寮の部屋数は全部で十二ある。一つの部屋に二人が生活するので、寮生は全部で二十四人だ。一つの列に六人が掛ける。俺はトレーに載せられた夕食をワゴンから取ると、麻梨亜と一緒に、一番奥の席に座った。麻梨亜が端に座り、俺がその横に座る。すると、俺の横で誰かがイスを引いた。見上げると、そこには結城真緒がいた。

「あなたも寮生だったのね。嬉しい！」

真緒が妖しい笑みを浮かべながら言った。真緒がイスをこちらへと寄せてくる。俺は麻梨亜の方へと身体をずらした。

全員が席に着いたところでお祈りが始まった。俺は戸惑いながらも、みんながしているように胸の前で手を組んだ。お祈りが終わったあと、みんなが一斉に食事を始めた。

今日のメニューはビーフストロガノフだった。スプーンですくい、口へと運ぶ。料理はとても美味しかった。

雑談をしながらの食事は楽しかった。男同士で食べるよりも、元気で明るい女子の声を聞いて食べる方が美味しいような気がした。再三言っているが、俺は女性恐怖症であって女性嫌いではない。こういう雰囲気の中で食べるのもなかなか良いものだと思った。

夕食も中盤に差し掛かったところだった。真緒が盛り上がっていたスイーツの話しから急に話題を変えた。

「それにしても、千尋はよく一人であの部屋で生活できるよね……私なら怖くて夜眠れないかも……」

「えっ？　一人？」

俺は真緒の言った言葉に何か違和感を覚えた。

９へと続く……

第九話　食堂

9

「うん。新しい生徒が入ってくるって聞いたときには、どこの部屋を使うんだろうって思ってたの。だって一室を除いて空いてる部屋なんてなかったし。でもまさかあの部屋を使うなんてね～」

真緒がフォークで突き刺したサラダのキュウリを口の中へと放り込んだ。ポリポリと小気味よい音がした。

「えっ？　でも、私、一人じゃないよ。ちゃんとレイちゃんが……」

「レイちゃん？　そんな子いたっけ？」

「いたよ。黒くて長い髪のすごく可愛い女の子」

そう言いながら、俺は食堂を見渡した。真緒に彼女のことを教えようとしたのだ。だが、食堂を見渡しても、どこにもレイの姿はなかった。

「千尋ったら面白～い。でもそれが本当なら逆に怖いけど。さて、宿題終わらせなきゃ。レイちゃんのお話、また聞かせてね」

夕食を全て食べ終わった真緒が、トレーを持って席を立った。

「あ、ちょっと！　まだ聞きたいことが……」

俺が言うと、真緒は手を振りながら食堂から出ていった。

「ねえ、麻梨亜は知って……」

横にいる麻梨亜に聞こうと思ったが、そこにはすでに麻梨亜の姿がなかった。食堂を見渡すと、麻梨亜も真緒同様、食器を片づけている。

「ちょ、ちょっと麻梨亜！　聞きたいことがあるんだけど」

麻梨亜に向かって言うと、

「ごめんなさい……私も宿題をしなきゃいけないから……」

俺と視線を合わせず、うつむいたまま麻梨亜が言った。麻梨亜は小さくお辞儀をすると、慌てて食堂を出ていった。

他の生徒たちも俺と目を合わせようとしない。急ぐように夕食を済ませると、みんな食堂から出ていってしまった。

（な、何なんだ……）

食堂に一人取り残された俺は、残っていたビーフストロガノフを掻き込むように食べると、食器を片づけ、自分の部屋に戻った。

２０４号室……

「やっぱりいるじゃない……」

「何がですか？」

部屋に戻るとそこにはちゃんとレイの姿があった。レイは俺の言葉に不思議そうな顔をした。

「ううん、何でもないの。気にしないで」

「……そうですか……」

「それより、夕食の時に姿を見かけなかったけど、体調でも悪いの？」

透き通るような白い肌をしているレイ。顔の色も本当に透き通るような白い色をしているのだ。かといって、体調を崩したときのような青ざめた色ではない。

「……はい。ちょっとお腹が痛くて」

（そうなのか……まあ、女の子だからね）

お腹といえば、何だか下腹部がもぞもぞしてくることに気づいた。夕食の時、水を飲み過ぎたのかもしれない。俺は部屋に備え付けてあるトイレに駆け込むと、鍵を閉めて便座に座った。そして座ったところであるとても重要な事柄に気づいたのだ。

（これって……やっぱり脱がなきゃいけないよな？）

視線を股間へと下ろす。ついているべきものがついていない現実を直視する。このままジャーすれば、やはり北極三号の中は……。いや、ジャーならまだましだが、ぷりっとなると……。

悲惨な状況が頭に浮かぶ。俺は慌ててリアル女体スーツ『北極三号』に手をかけた。かけたはいいのだが……。

（ん？　これ、どうやって脱ぐんだ？）

麗菜に脱ぎ方を聞くのを忘れていたことに気づく。俺は急いでパンツを上げると、トイレを出てケータイを手に取った。

麗菜の番号に電話を掛ける。

トゥルルルルル　トゥルルルルル

出ない

トゥルルルルル　トゥルルルルル

……出ない

ルールルルルル　ルールルルル

……キタキツネを呼んでいる場合ではない

トゥルルルルル　トゥルルルルル　ガチャ

（よしっ！　繋がった！）

「甘いぞ千尋！　電話に出たと思ったら大間違いだ。私は今、理事長室で人には言えないことをしているので電話に出ることができない。用があるなら発信音の後にメッセージを入れろ。覗きに来たらぶっころ……　ピーーーーー」

（……何で俺宛の留守電メッセージ……あいつ、俺以外から電話が掛かってこないのか？　それにしても最後の途切れた言葉が気に掛かる……）

麗菜は理事長室にいるようだ。とにかく早く理事長室にいかないと……。

女体スーツを着て以来、トイレに行っていないことに今更ながら気づく。行っていないと思うと余計に尿意が増してきた。

「ちょっと出かけてきます！」

「はい……お気をつけて」

胸の前で小さく手を振りながら見送るレイを部屋に残し、俺は廊下に出ると、小走りで階段へと向かった。走ると出てしまいそうなのだ。

階段をできるだけ早く駆け下り、寮の出入り口に手を掛けた時だった。

「どこへ行くのじゃ？」

後ろから高い声がした。よく時代劇などで、眉毛をまん丸にして、真っ白な顔をしたオッサンが『麻呂は……おじゃる』と言うような高い声だ。俺は慌てて後ろを振り返った。だがそこに誰の姿もない。俺は再び出入り口に手を掛けた。

「どこへ行くのじゃ？」

また後ろから声がする。振り返ってみても誰もいない。俺は深呼吸をひとつして、冷静になって考えてみた。そして俺はある結論に達した。

（そうか。この扉にはセンサーがあって、時間外に誰かが外に出ようとすると、センサーに反応して音声が流れるんだ。門限を破って外に出ようとする後ろめたい気持ちがあるから、この程度の音声でもビックリしてしまい、外に出なくなるって考えてるのかもしれない。ふふふ。麗菜の考えそうなことだぜ）

この寮のセキュリティを解析した俺は、ニヤリと口をゆがませながら、ゆっくりと扉を押した。外から爽やかな秋風に乗って虫の声が流れてくる。外に出ようとしたときだった。俺は何かに足を取られバランスを崩した。

扉に手を掛け、何とか転倒は免れた。足元を見てみたが、何もつまずくものなどなかった。

（何だよ……ああ、今のでちょっと出ちゃったじゃないか……）

気を取り直して外に出ようとする。

「どこに行くのじゃ」

再びセンサーに反応し、音声が流れる。俺は音声を無視し、扉を開いた。するとまた何かに足を取られる。だが今回は扉を開いていたため、それに捕まることができずに見事に転倒した。

（痛たたた……）

ぶつけたおでこをさすりながら立ち上がる。

「何度も言わすからじゃ」

後ろから先ほどの音声とは違う言葉が聞こえる。俺は慌てて後を振り返った。だがそこには誰の姿もなかった。その代わり、手首のあたりで切断された人間の手に、俺の足首はしっかりと掴まれていたのだった。

１０へ続く……

第十話　再び理事長室へ

１０

足首をしっかりと掴む手首に思わず絶句する。人間、本当に怖いときには悲鳴など上げる余裕がないのだなと、俺はこのとき初めて知った。それと同時に何かなま暖かいものが俺の足を伝ってゆくことに気づく。俺は慌てて、キュッと下腹部を引き締めた。何とか少しの放尿で免れたようだった。

改めて足首に視線を落とす。だがそこには先ほどの手首は存在していなかった。

「な、なんだ……俺の見間違いか……おしっこを我慢しすぎて幻覚を見たのか……うんうん、そうに違いない。そうに違いないんだ……って、そんなはずあるか！」

「何を自分にツッコんでおるのじゃ？　お主は男で、周りにはオナゴだらけ……ツッコむ場所が沢山あるのに、それにツッコむことができないジレンマに気でも違ったか？　ふぉふぉふぉふぉ」

周りを見渡しても人はいない。どこからか聞こえてくる下ネタの発信源を探すがどこにもない。

「ここじゃここじゃ」

足元から声がする。下を向くと、そこには管理人の老婆がいた。

「わっ！」

俺を見上げて中指を立てる老婆。こういう場合はピースサインだろうが！　とツッコミを入れる間もなく、老婆は軍人が地面を這うように前に進むような形で俺に近づくと、俺の足首を特製のマジックハンドで掴んでいた。

「な、何やってるんですか？」

「それはこっちの台詞じゃ。こんな時間にいったいどこに行くのじゃ？」

老婆は俺の足首を掴んでいたマジックハンドを操作しながら尋ねてきた。

「ちょ、ちょっと野暮用ですぅ」

出来るだけ可愛らしく答えると、老婆は……

「キモっ！」

と、ギャルのような口調で答えた。

「き、キモって……あんた一体何歳だ」

思わず地の言葉が出てしまう。気づいて言葉を直そうとするが、

「おまえが男なのはとっくにバレておるわい」

と、淡々とした口調で言われる。

「えっ？　ど、どうして分かったんですか？」

リアル女体スーツを着ているし、女の子に見えるように仕草に気をつけていた。まだ誰にもバレていないのにこの老婆にはバレてしまっているようだった。

「だてに女を九十年やってるんじゃないよ」

（きゅ、九十だったのかこのバアさん……）

「な、何でバレたんですか？　教えてください……今後の役に立つかもしれないから」

「教えてほしいか？」

「はい、是非」

「よし、お主は素直そうじゃから話してやろう。そうじゃのお、どこから話せばよいかのお。ワシの勘が鋭くなったのは、ワシの亭主が他のオナゴのところに通い詰めているのではないかと疑い始めた頃だったかのお。あの当時、亭主と仲のよかった坂本竜馬が亭主を誘いに……」

老婆は思い出に浸りながら語り始めている。作戦成功。こういうバアさんには昔話を語らせるに限る。俺はそのスキに女子寮をあとにした。

少し時間をロスしてしまった。尿意はどんどん高まってくる。少し漏らしてしまったが、このままではスーツの中が大変なことになってしまう。俺は競歩のように腰をくねくねさせながら理事長室へ

と急いだ。

それにしてもどうして老婆には俺が男であることがバレてしまったのだろうか？　彼女の昔話の出だしでは、勘が鋭くなったのは亭主の浮気がどうたらこうたらと言っていたから、俺の正体を見破ったのは、老婆の（いや、妖怪と言うべきか）勘なのだろうか。だが今はそんなことを考えている場合ではなかった。高まる尿意に身体の震えが止まらない。ようやく女学院の校舎にたどり着くと、一滴出た。

校舎はすっかり明かりが消えている。廊下は薄緑色のランプに照らされ不気味な雰囲気を醸しだしている。誰もいない廊下を競歩の選手のごとくクネクネ歩く。歩く度、上靴を履いた俺の足音が、ひっそりとした廊下にこだまする。俺は恐怖に怯えながら、職員室の前を通り過ぎた。

廊下から中を見る。明かりはついているが、中に人の気配はなかった。

職員室の中から理事長室へ入ることも出来るが、もし誰かがいたら厄介だ。中には誰もいないようだが、俺は安全な方を選んだ。理事長室の正面の扉から入る方が確実なのだ。

職員室の横にある理事長室の扉の隙間から明かりが漏れている。留守電メッセージの内容から分かるように、中に麗菜がいるのは明らかだった。俺は理事長室の扉の前に立った。

すると、中から何やら人の声がする。麗菜の他に誰かいるのだろうか？　他に人がいるとなると少々厄介だ。俺は理事長室の扉にぴったりと耳をあてると、そこから中の様子を窺ってみた。

「んん……はぁあん」

女の荒い息づかいが聞こえる。

（ん？　何やってんだ？）

もう一度耳をくっつけ、中の様子を窺う。

「はぁあん……んん……ぁあああん」

鼻に掛かったような甘えた声が聞こえる。その他には声がしない。どうやら中には麗菜一人のようだった。

念のためもう一度確かめてみる。

「ぁあ……ぁはぁああん……んん」

やはり麗菜の甘えた声しかしない。俺は理事長室の扉のドアノブを握ると、それを回して扉を開けた。

１１へと続く……

第十一話　正体は？

１１

理事長室の扉を開くと、そこにはピッタリとしたレオタードのようなウェアを着た麗菜の姿があった。

薄いピンク色の生地から肌が透けて見える。汗をかいているからその透け具合はハンパない。形のよい膨らみに視線をやると、こちらが照れてしまいそうな程の透け具合だ。股間に視線を移すと、そこはＲ１５指定では表現できない状態になっていた。汗に濡れたウェアを着たまま、麗菜は理事長室に持ち込んでいたトレーニングマシンで筋トレをしていた。

「相変わらずややこしい奴だな」

「ぅ、うるさい……はぁあん……誰にでも欠点はあるものだ……ぁあん……それより……はぁああん……何の用だ？」

「人が聞いたら勘違いするから一旦筋トレをやめろ」

先ほどからずっとマシンでトレーニングを続ける麗菜に忠告する。筋トレをする際、麗菜は誰がどう聞いても勘違いをする声を出すのだ。普段は低い声で男の様なしゃべり方をする麗菜。筋トレの時だけは鼻に掛かったような甘い声を出す。本当にややこしい奴だ。麗菜は珍しく俺の言うことを聞くと、机の上にあったスポーツドリンクを手に取ると、腰に手を当て、オッサンのごとくグビグビと飲み始めた。

「ぷふぁ～！　このために生きてるな！」

オッサンの様に唸る。スポーツドリンクを机の上に置くと、麗菜は俺の顔をじっと見つめた。

「で、用件は何だ？」

「ああそうだった……。このスーツ、一体どうやって脱いだらいいんだよ。おしっこが漏れそうなんだよ」

「ふっ……それはそれで面白いじゃないか」

「人事だと思ってこの女……もしスーツの中がたっぷんたっぷんになったら、ここで腹を割いてやるからな」

「……それは困る」

「じゃあ脱ぎ方を教えろ」

「ふっ、簡単なことだ。背中にあるポッチを押せ」

「せ、背中？　どこにあるんだよ」

「背中の真ん中のあたりだ」

俺は右手を左の肩から背中に回し、ポッチを探した。なにやら背中に突起の様なものがあるが、指先がほんの少し触れるか触れないかの場所にあるので、それを押すことができない。ならばと、俺は下から手を伸ばしてポッチを押そうとした。だが下から手を伸ばしても、指先が触れるか触れないか微妙な場所にある。

「恐ろしく身体が固い奴だなお前は……毎日ストレッチをしろ、ストレッチを」

「おい。呆れてないで押してくれよ」

「まったく……しょうがない奴だ」

麗菜はヤレヤレといった感じで俺の背中にあるポッチを押した。ぴったりと張り付いていたスーツが緩む。俺は肩から順にスーツを脱いだ。

「やばい。おしっこができると思うと我慢できなくなってきた」

俺は下着の上から股間を押さえたまま廊下へと飛び出した。長髪のウィッグをつけたまま、下着一枚で股間を押さえながら廊下を走る姿はまさに変態だ。学院内に誰もいない時間で良かった。もし誰かにこんな姿を見られたとしたら……。

そんなことが頭をよぎったと思っていたら、目の前で絶句する女性が一人。俺の方を指さしながら、ワナワナと震えているではないか。

「き、き、き……」

目の前にいる春日由里絵は悲鳴を上げようとしている。俺は無意識のうちに彼女の口を手で塞いだ。塞いだはいいのだが……。

俺は今、リアル女体スーツ『北極三号』を脱いでいる。そして俺の手が春日由里絵の唇に触れている。彼女の柔らかな唇の感触が手

のひらにあたり、身体を密着させているので、彼女の巨乳が俺の身体に触れている。次の瞬間、俺の頭の中に幼い頃麗菜から受けたあんなことやこんなことやそんなことが走馬燈のように駆け巡る。俺の意識は徐々に薄れていったのだった……。

どれだけ時間が経ったのか分からないが……

「まったく……高校二年にもなってお漏らしをするとは……一滴も残すなよ。我が女学院がお前の小便で汚されてしまうなんて……女学院始まって以来の汚点だ」

胸の前で腕を組みながら不機嫌な顔で俺を見ている麗菜。

(何だよ……元はと言えばお前が脱ぎ方を説明しなかったのが悪いんじゃないか……)

心の中でそう叫びながらモップで廊下をしっかりと掃除する。

「文句を言わずさっさとやる!」

「何も言ってないだろう!」

「心の中で言っていただろう」

「お前は俺の心が読めるのか?」

「ああ、お前のような単細胞の心を読むことなど造作もないこと」

「じゃあ今なにを考えていたか当てて見ろよ」
「よし、当ててやろう。あ～あ。俺が女性恐怖症じゃなかったら、女子寮にいる女の子たちとやりまくりなのにな……だろう？」
「……」
「ふっ、図星か」
「そ、そんなことより……」
「なぜ急に話題を変える？　スケベ心を読まれたことがそんなに悔しいのか？」
「そ、そんなんじゃないぜ。ほ、本当に聞きたいことがあるんだ」
「聞きたいこと？　何だ？」
「俺のルームメイトのことだ。彼女は一体何者なんだ？　寮生たちに聞いても知らないって言うし、親切な加納麻梨亜も話をはぐらかすし……彼女は一体」
「そんなに知りたければ教えてやろう。彼女はレイだ」
麗菜が高慢な口調で言い放つ。
「何を偉そうに言ってるんだ。彼女の名前はもう知ってるって。俺が知りたいのは彼女の素性だ」
「だから、彼女はレイだ」

「お前バカか？」

「きゃあっ！　綾辻君！　大丈夫？　死んでない？」

麗菜の延髄切りをまともに食らい目の前に星が飛んでいるが何とか生きている。そばにいた春日由里絵が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「何すんだよ！　お前が悪いんだろう？　同じ答えを言いやがって」

「私は悪くない。悪いのはお前だ。私はちゃんと答えたではないか。お前のルームメイトであるレイは……」

麗菜は窓ガラスにハーッと息を吹きかけた。窓ガラスが白く曇る。麗菜はそこに『霊』という文字を書いた。

「お前のルームメイトのレイは霊なのだ」

１２へと続く……

第十二話　麗菜の想い

１２

突然の告白に、一瞬頭が真っ白になった。だが消えかかる窓の『霊』の文字を見ながら気持ちを落ち着かせる。冷静になると、寮生のあの態度やトメさんの遠回しな言葉の意味が理解できた。

「じゃ、じゃあお前はあの部屋に幽霊がいることを知った上で俺をあの部屋に住まわせたのか？」

「そういうことだ」

「何でそんなことするんだよっ！」

「何でだと？　そんなこと決まっているじゃないか。同じ部屋で生活をするとなれば、お前が男であるということが遅かれ早かれ気づかれてしまうことになるだろう。その点を考慮すれば、レイとの生活はお前にとって都合がいい。だって幽霊だもの」

どこかの詩人のような言葉で締めくくる麗菜。彼女の言っていることも一理ある。例えばトレイの時だ。トイレに行くときには女体スーツを脱がなければならない。レイ以外の女の子がルームメイトだとしたら、毎回バレないかハラハラしながらスーツを脱がなければならないのだ。通常ならばそれを隠すのは可能だろう。だが今日のような緊急事態がこの先起こらないとも限らない。いや、必ずそういう状況に追い込まれることもあるだろう。もしかして麗菜はそこまで考えて俺をレイと同じ部屋にしたのではないか？　俺の中ではそんな結論に至っていた。

「それに……」

「それに？」

「お前と幽霊が一緒に生活するところも見てみたい。だって面白そうだし」

（本音はそっちかっ！）

俺は心の中でツッコミを入れた。でもまあ、麗菜の言うとおり、この方が都合がいいのは確かだ。春日由里絵が手渡してくれた女体スーツに俺は袖を通した。

スーツが身体に馴染んでゆく。廊下の窓に映る全裸の姿は、どこからどう見ても女子高生である。俺は服を着ると、その場を後にした。

女子寮に戻って入り口のドアを開けた。玄関先では、上向き加減で目を閉じながら、トメさんが昔を思い出すように一人で話をしている。俺はトメさんに気づかれぬよう、後ろに立ち、昔を懐かしむ老婆の話を聞いていた。

「……というワケじゃ」

「へえ……そうだったんですか」

あたかもずっと話を聞いていたように返事をする。全てを話し終えたトメさんは満足そうな笑みを浮かべながら管理人室へと姿を消した。

二階へと続く階段を上って廊下に出る。俺は２０４号室の前に麻梨亜の姿を見つけた。

扉の前で何やらそわそわしている。ノックしようかしまいかを迷っているようだった。俺に何か用事があるのだろうか。

「麻梨亜、どうしたの？」

少し離れた場所から彼女に声を掛けた。彼女はビクッと肩をすくめながらこちらへ振り向いた。

「あっ、千尋……部屋にいなかったんだ」

「うん。ちょっと理事長に用事があって」

「理事長に？　よく外に出られたわね。管理人のトメさんに止められなかった？」

「あ……うん、止められたけど何とかうまくごまかせたから……それよりも、私に何かご用？」

制服を脱ぎ、普段着に着替えている麻梨亜。お尻のあたりまで隠れるグレーの部屋着に、黒のレンギンス姿の彼女。髪はしっとりと濡れ、そこからフルーティーな香りが漂ってくる。どうやらすでにお風呂に入ったようだった。

「えっと……千尋に話したいことがあって」

「私に？　なになに？」

「あの……ここじゃちょっと……よかったらラウンジで話さない？」

「うん……いいけど」

この寮にはラウンジなるものが存在するのかと少し驚いた。俺は麻梨亜に続いて一階へと続く階段を下りた。

ラウンジは食堂のすぐ隣にあった。いくつか丸テーブルが置かれていて、普段はここでトランプをしたり、おしゃべりをしているのだと麻梨亜が言っていた。今日は珍しく誰の姿もなかった。俺たちはテーブルのひとつに向かい合う形で座った。

麻梨亜は何か俺に言いにくいことでもあるのだろうか。さっきからソワソワして落ち着かない様子である。どうも彼女からは言い出しにくそうなので、逆に俺の方から聞いてみることにした。

「話って何かな？」

今まで視線を逸らしていた麻梨亜が俺の顔を見た。俺はニコリと笑った。その顔に安心したのか、固かった麻梨亜の表情が崩れる。

「あの……実は千尋のお部屋の話なんだけど……」

なぜ表情が硬かったのか、彼女の言葉で合点がいった。麻梨亜はあの部屋の秘密、そう、レイのことを俺に伝えようとしているのだ。わざわざ言いにくいことを俺に教えようとしてくれる麻梨亜の優しい気持ちが嬉しかった。

「うん。もう知ってるよ。幽霊が出るんでしょ？」

俺の言葉に麻梨亜が驚きの表情を見せた。

「し、知ってたの？」

「うん。さっき理事長から聞いたの。でも大丈夫よ。私、その手のことに関しては鈍感だし、あまり気にしないから」

「で、でも夕食の時に、髪の長い女の子がどうのって……」

「あ、あれ？　あれは私の勘違いよ。だって部屋に戻ったら誰もいなかったし、編入初日だったからきっと疲れていたんだわ」

「そう……それならいいんだけど」

「それよりもありがとう。麻梨亜は私にそのことを伝えようとしてくれたんだよね。言いにくいことなのに話してくれて嬉しかったわ」

俺の言葉に安堵の色を浮かべる麻梨亜。よほど俺のことを心配してくれたに違いない。そんな麻梨亜の優しさに、胸のあたりがきゅんと疼いた。

「それじゃあ私、部屋に戻るね。まだ宿題が終わってないんだ」

「うん。わざわざありがとう。それじゃあ、おやすみなさい」

「うん。おやすみなさい」

先ほどとは違い、晴れやかな顔でその場を立ち去る麻梨亜。きっと俺に伝えるべきかどうか悩んで宿題が手に着かなかったに違いな

い。麻梨亜は本当に良い子だと改めてそう思った。

ラウンジを後にして二階へと続く階段を上る。レイの正体を俺の方から言い当てたら、きっと彼女は驚くに違いない。少し驚かせてやろうと思いながら２０４号室の扉を開ける。

「ただいま！　レイの正体、分かっちゃった～」

と、明るい口調で部屋に入る。すると部屋の真ん中あたりに座り、こちらをジッと睨んでいる鎧を着た落武者の姿があった。

１３へと続く……

第十三話　落武者

13

部屋の真ん中にいる落武者。鎧甲を身に纏い、はげ上がった頭のてっぺんが月明かりに照らされて光っていた。

両側に垂れた長い髪はボサボサで、寝起きのように広がっていた。顔は青白く、鼻の下にちょびではない髭が生えている。眼光は鋭く、ずっとこちらを睨んだままだった。

「ど、どちら様ですか？」

じっと俺を睨む落武者に尋ねる。

「拙者、広小路定宗と申すものでござる」

（ひ、広小路？）

「その広小路さんが私の部屋にどう言った御用で？」

「この部屋に女と一緒に住む男が現れたと聞きつけ、駆けつけたのでござる」

「えっ、綾辻さんって男だったんですか？」

部屋の隅にいたレイが驚く。暫く一緒に生活をして、そしてその後、何かの拍子でバレた時に説明するつもりだったのだが、速攻でバレてしまった。

「だ、誰に聞いたんですか？　男だってことを……」

「それは拙者の口からはちょっと……」

この落武者。名前からして麗菜に関係しているに違いない。あいつの人脈はいったいどこの世界まで繋がっているんだ？　聞いてみたい気もするが、知ってしまうのが怖いので聞かないようにしておこうと思った。

「で、その広小路さんはここで一体何をするんですか？」

「何を決まりきったことを……そこの女に卑猥なことをすることがあったならば、お主を成敗しようと」

「卑猥なことって……レイは幽霊ですよ？　どうやってそんなことするんですか？」

「触れずとも卑猥なことはできるであろう……例えばこんな事とか」

そう言うと、落武者は下半身を露出し、部屋の隅にいたレイに局部を晒した。

「きゃあああああああああっ！」

レイが顔を手で覆いながらその場にしゃがみ込む。

「お前が出してどうする！」

たまたま近くにあったハリセンで落武者の頭を叩く。だがハリセンは空を切った。

「残念でした〜！　お主に拙者は倒せん。だって拙者は幽霊だもの」

どこかの詩人のような結びで答える落武者、広小路定宗。

（く〜っ！　なんかムカつく）

「武士がそんなことしてもいいのか？　武士が女の前でそんな格好をして恥ずかしくないのか？　武士道とはなんぞやっ！」

ワザと武士の心を挑発する。武士ならば、この言葉にきっと反応するだろう。思った通り、目の前でおちゃらけていた広小路定宗の顔色が変わった。定宗はその場に膝から崩れ落ちると、先ほどのふざけた口調とはうってかわった態度に出た。

「せ、拙者としたことが……あのような不埒な真似を……ぶ、武士として恥ずかしい事をしてしまった。ここは武士らしく、責任をとらせて頂く」

そう言うと、定宗は短刀を抜き、それを目の前に置いた。

定宗はどこかから取り出した短冊を手に取ると、これまたどこかから取り出した筆を使って辞世の句を書き始めた。書き終えて筆を置くと、その隣に短冊を置いた。俺はその短冊をちらりと見た。

『あわれなり　あいつに釣られて　出しちゃった』

「では……」

そう言うと、定宗は月明かりでキラリと光る短刀を自分の方に向

けると、それを一気に自分の腹へと突き刺した。

「うっ……うううううううっ！」

唸り声を上げ、うずくまりながらお腹を押さえる定宗。短刀を突き刺したあたりに手をやったあと、自分の手のひらを見てワナワナと震えだした。

「き、切れてな～い！」

俺の方に手のひらを向け、切れてないアピールをする。俺は近くにあったハリセンで定宗の頭を叩いた。ハリセンは空を切った。定宗は人差し指を立てて左右に振りながら、チッチッチッと舌を鳴らした。

「そんなの全然利かない……だって幽霊だもの」

どこかの詩人のような結びで答える定宗。

（くううっ！　ムカつくっ！）

「あの～茶番はそれぐらいにして……」

「茶番って言うな！」

レイの言葉に、定宗と同時にツッコミを入れてしまった。

「全く……麗菜め……余計な奴を呼びやがって。やっぱ一言文句を言ってやろう」

俺は携帯を取り出すと、麗菜の番号に電話を掛けた。

トゥル　ガチャっ！

「出るの早っ！」

「私は広小路定宗などという落武者など知らぬ！　ガチャ！　ツーツーツーツー」

（まだ何も言ってないし……）

携帯から通話が切れた音が漏れ続ける。

麗菜は一体どこから情報を手に入れるのだろうか……。そんなことよりも……。

「出ていけよ。ここは俺たちの部屋なんだ」

定宗にこの部屋から出て行くように言った。

「断る！　若い男女が同じ部屋で生活するのは教育上よろしくない。拙者が出て行けば、お前は必ず彼女に対して卑猥な事をするはず。拙者、武士としてそれを見逃すワケには行かぬわ！」

「だ～か～ら～。幽霊相手にどうやって卑猥な事をするんだよ」

「触れずとも卑猥な事はできるであろう。例えばこんな事とか……」

定宗がレイの前で局部を晒す。

「きゃあああああああああっ！」

レイが悲鳴を上げ、俺がハリセンで定宗の頭を叩く。が、ハリセンが定宗の身体をすり抜ける。

「ふはははっ！　無駄、無駄、無駄、無駄あああああっ！　だって、幽霊だもの」

「ぶ、武士として恥ずかしくないのかあああ」

「はっ、そうだ。拙者は武士であった……」

定宗が短冊に辞世の句をしたためる。

『ごめんなさい　あいつに釣られて　また出しちゃった』

「では……」

そう言うと、定宗は月明かりでキラリと光る短刀を自分の方に向けると、それを一気に自分の腹へと突き刺した。

「うっ……うううううううっ！」

唸り声を上げ、うずくまりながらお腹を押さえる定宗。
定宗は短刀を突き刺したあたりに手をやったあと、自分の手のひらを見てワナワナと震えだした。

きっとまた同じ事を繰り返すと思ったので放って置いた。案の定、同じ台詞を繰り返している。呆れた俺は、ふと窓の外に視線を移した。すると、女子寮から出て行く加納麻梨亜の姿を見つけてしまっ

たのだ。

「麻梨亜さん、こんな時間にどこに行くんですかね？」

いつの間にかそばに来ていたレイが呟くように言った。　女子寮を離れるにつれ、麻梨亜の姿が見えにくくなる。そしてついには、麻梨亜は闇の中へと姿を消していったのだった。

１４へと続く……

第十四話　切腹

１４

（ね、眠れない……）

午後十時三十分を過ぎると、女子寮内の明かりが消された。編入初日。色々な事があって身体はとても疲れている。さっさとベッドに入って身体を休めようと思ったのだが、とても休めるような状況ではなかった。

レイは布団の上で仰向けになりながら、手を胸の上で組んで寝ている。ぴくりとも動かず眠っている姿は、まさに天に召された姿そのものだった。

それに引き替え、定宗は寝相が悪い。俺の上をプカプカと浮きながら、乱れた髪を俺の顔の上に垂らしている。口を開けながらイビキをかく姿は、年頃の娘から『うざっ』と言われるオヤジの姿そのものだった。開けた口から今にもヨダレが垂れそうで、おちおち寝ていられない。俺は布団から出ると、窓際に置いてあった丸いイスに座り、月を見ていた。

そばには女体スーツ『北極三号』が吊ってある。もうレイには素性がバレているので、眠るときにはスーツを脱ぐことにしたのだ。

（今日は満月だな……）

夜空に浮かぶまん丸な月を見ていた時だった。女子寮を取り囲むように植えられたバラの生け垣のあたりで、何か黒い影が動いたよ

うな気がした。俺は身体の位置をずらし、目を凝らしながら影が動いたあたりを見てみた。

（あっ……麻梨亜だ……）

そこにいたのは、先ほど女子寮から抜け出した麻梨亜の姿だった。

彼女が女子寮を出てから一時間ほど経過している。麻梨亜は一時間もの間、外にいたことになるのだ。

（こんなに長い時間、外で何をしていたんだろう？）

当然の疑問がわき起こる。この女子寮はトメさんの厳重なる監視下にあるので、そう簡単には外に出ることはできないのだ。なので、麻梨亜は何か特別な用事があって、許可をもらった上で外に出ていったと思われる。そう思うと何だか気が抜けた。俺は初日の疲れもあって、その場でウトウトとし始めていったのだった。

翌日……

「……ください」

「千尋さん……ください」

遠くでレイの声が聞こえる。

（……ください？　千尋さん、ください？）

半分眠った状況の中、俺は以前、こっそりと盗み見た親父のエッチなビデオの内容を思い出していた。何度も言うようだが、俺は女

性に触れられるのが怖いだけであって、女性が嫌いなわけではない。
当然、年頃の男としては、そういったビデオにも興味があったわけで……。確かそのビデオの中で……。

「おらおら、これが欲しいのか？」

「ああん、欲しいです」

「欲しかったらお願いしてみろ！」

「ああん、ください」

――――――――――――――

「千尋さん……ください……」

――――――――――――――

近くでレイの再びレイがそんな言葉を言った。

「もう……しょうがねえなあ。そんなに欲しいなら」

少しの沈黙のあと……

「きゃあああああああああああああっ！」

レイの悲鳴で飛び起きる。気づくと俺は、朝の生理現象でとんでもないことになっているモノを、レイの目の前に惜しげもなく晒していた。

パコオオオオオン！

突然後頭部に衝撃が走る。振り向くと、ハリセンが宙に浮かんでいた。その後ろには定宗が呆れた顔で突っ立っていた。

「お、お前、モノが掴めるのか？」

「直接モノをつかむことはできん。じゃがモノを念力で操ることは可能じゃ。だって幽霊だもの……」

「……」

俺が黙った事で、何度も言ったフレーズがもうウケない事に気づいたのか、定宗の頬がピクピクと痙攣していた。

それよりも、お主はとんでもないことをしでかしたのぉ。いたいけな女の前で、そんな卑猥なモノを晒しおって！　腹を切れ、腹を！」

そう言うと、定宗はどこかから短刀を取り出し、俺の前に置くと、これまたどこかから取り出した短冊と筆を俺に渡した。

俺は辞世の句を詠んだ。

『ごめんなさい　夢と間違え　出しちゃった』

目の前の短刀を手に取り、キラリと朝日を浴びて光る刃を自分の方へと向けた時だった。

コンコンコン……

部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「千尋～起きてる？　一緒に朝ご飯いこっ」

ドアの向こうから結城真緒の声がした。

コンコンコン

「ねえ、まだ寝てるのぉ？　入るわよぉ」

（や、やばいっ！）

女体スーツはまだ着ていない。俺は俺のままである。

「あっ、ぉ、起きてるわよ。ちょっと待ってねっ、今着替えてるところだからぁ」

「そうなの？」

何故か嬉しそうな声が外から聞こえる。

「じゃ～あ～……入っちゃおうかな」

ドアノブに手をかけて、それを回す音がした。よく考えたら、昨

日ドアに鍵をかけるのを忘れていた。

「やばいよ、やばいよ、やばいよ」

とあるお笑い芸人のようなダミ声であたふたする俺。

「早くこれを着ろ！」

定宗が念力で女体スーツを俺の方へと投げた。俺はそれをキャッチすると、慌ててスーツに袖を通した。

「お前ら、隠れろっ！」

幽霊二人組は布団の中に隠れた。と同時に部屋のドアが開いた。

「おはよう、千尋……あら……もう、千尋ったら～。着替えてるなんて嘘を言って～。そんな格好して。もしかして誘ってる？」

視線を落とす。女体スーツに袖を通したばかりなのでまだ下着もつけていない。つまり全裸である。

「もう、しょうがないなぁ～」

ニヤニヤしながら、真緒は後ろ手でドアを閉めた。

真緒が妖しい笑みを浮かべながらこちらに近づいてくる。しかも着ている制服のブラウスのボタンをひとつずつ外しながら。

（や、やばい）

俺は身の危険を感じた。だが、肝心な時に身体が動かない。触れられるかもしれないという恐怖から、身体が動かなくなってしまったのだ。そうこうしているうちに、真緒は俺の目の前に立っていた。

「……千尋の裸、すごく綺麗……」

俺の背中に手を回し、抱きつく真緒。女体スーツのおかげで直接触れることがないので、失神まではいかなかった。だが、次の瞬間、真緒は目を閉じると、俺の顔に自分から顔を近づけてきた。真緒の吐息が唇に掛かる。

（やばい……もうだめだ……）

意識が飛びかけた時だった。部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「綾辻さん、起きてる？」

（ん？）

何故か外から真緒の声がする。

「ちょっとお話があるの。開けていいかしら？」

その声に真緒がビクつく。

「やばっ……」

真緒が慌ててどこかに隠れようとするが、ドアが開く方が早かった。

扉がゆっくりと開く。

今俺の横にいるはずの真緒が、何故か扉の向こうに立っていたのだった……。

１５に続く……

第十五話　秘密

15

扉の向こうに立っていたのは、真緒と同じ顔をした女の子だった。だが真緒は確かに俺の横に立っている……というか、俺に抱きついている。

「真緒……あなたまた……」

扉の向こうにいる、真緒と同じ顔をした少女が顔をしかめながら真緒を見つめて言った。

「私、何もしてないも～ん。さあ、朝ご飯、朝ご飯」

そう言うと真緒は俺から離れ、何事もなかったかのように部屋から出ていった。

「あ、あの～」

扉の前に立つ真緒に似た少女に恐る恐る声を掛ける。

「ごめんなさい。妹が失礼なことをしたみたいで……とにかくそのままの格好ではまずいですわ。着替えが終わったら呼んでくださる？」

彼女は裸の俺の頭の先からつま先までゆっくりと見た後、扉を閉めた。

「あのお方は真緒さんのお姉さんの真夜さんです。ちなみに双子ではありませんよ」

布団に隠れていたレイが、彼女のことを教えてくれた。

「へえ～お姉さんなんだ。どうりで似てると思ったよ」

制服に着替えながらレイと言葉を交わす。

「彼女は麗香女学院の生徒会長さんなんですよ」

「へえ～生徒会長！　顔は似ていても、真緒とはえらい違いなんだな……」

※えらい違い＝真緒はちょっとアブナイ性癖の持ち主という意味で

「もういいですよ～」

制服に着替え終わった俺は扉の向こうにいる真夜に話しかけた。

「そう。分かったわ」

真夜が答えると、扉がゆっくりと開いた。すると、そこにはさっきと感じの違う少女が立っていた。

明るい栗色の髪を後ろでまとめ、それを左肩から前に回し、いつの間にか赤い縁のメガネを掛けている。先ほどの印象とは違い、どこか真面目な感じがした。

「あの、お……いや、私に何かご用ですか？」

生徒会長の真夜に尋ねる。

「別に大した用ではありませんわ。私、昨日の夕食の時は席を外していたので……それで今日あなたに挨拶をしに来ただけですわ。私、この麗香女学院の生徒会長をしている、結城真夜と申します」

真夜はお腹のあたりに両手を添え、丁寧にお辞儀をしながら挨拶をした。

さすがはこの女学院の生徒会長である。ひとつひとつの仕草にどこか気品が溢れている。理事長である麗菜とは『天と地』、『月とすっぽん』、『ウ〇ンのちからとウ〇コのちから』ほどの差がある。

「そ、それはどうもご丁寧に……」

こちらが恐縮してしまうほど、真夜の仕草にはスキがなかった。

「それでは朝食に参りましょうか」

真夜がくるりと身体をひるがえし、歩き始めた。

「え、ええ。そういたしましょう」

（やばい……言葉遣いがうつった……）

俺は真夜のあとをついて食堂へと向かった。

朝食の時、食堂は昨日とは全く違う雰囲気だった。生徒会長の真夜がいるからだろうか、寮生たちもどこかお上品に朝食を食べていた。

（な、なんだか堅苦しいなあ……毎日こんな雰囲気で食事をするんだろうか……）

心なしか、昨日の夕食よりも味が薄いような気がする。食事はやっぱり楽しい雰囲気で食べる方が美味しいのだ。そう思っていたときだった。

（真夜さんはとても忙しいので、一人で夕食を食べることが多いんです。なのであまり夕食時に顔を合わせることはありませんよ）

「えっ？」

頭の中でレイの声がハッキリと聞こえた。レイがここにいるはずはないのに……。

俺が不審に思っていると、

（ここです。カーテンのところ）

（カーテン？　どこだ？）

あたりを見渡す。食堂に光を取り入れる為の大きな窓のところに薄いグリーンのカーテンがある。その後ろに、なにやら人影を見つけた。

（そうそう。そこです）

（ん？　っていうか、何でレイと会話してるんだ？）

（私たちは直接相手の脳に話しかけることができるんです。だって幽霊だもの）

レイまでもがどこかの詩人のような結びで会話を終える。定宗の悪い影響だ。

（じゃあ誰にでも直接話しかけることができるのかい？）

（それは無理なんです。誰にでも話しかけられるワケではないんです）

（そ、そうなの？　じゃあ何で俺には直接話しかけられるんだい？）

（それは、千尋さんが選ばれた勇者だからなのです）

（ゆ、勇者？　俺が選ばれた勇者なのかい？）

（嘘です……）

「嘘かよっ！」

思わず声に出し、手を前に突き出しながらツッコミを入れてしまう。

「きゃっ！」

いつの間にか隣に座っていた麻梨亜が驚いて声を上げた。

「ど、どうしたの千尋、急に……」

「ご、ごめん。ちょ、ちょっと寝ぼけてただけ……。あ、それよりも麻梨亜、昨日の夜……」

（あああああああああああっ！）

レイが突然大きな声で直接頭に話しかける。

「うわあああああああっ！」

「きゃっ！」

その声に俺も思わず叫んでしまった。それに驚き麻梨亜が悲鳴を上げる。

「綾辻さん。食事中は静かに……」

真夜に注意されてしまう。

（レイ……何だよ急に大きな声を出すなよ。怒られちゃったじゃないか）

（麻梨亜さんには昨日のことは言わない方がいいと思います。麻梨亜さん、何かとても大事なことを隠しているような気がするんです。誰にも言えないような何かを……）

（何でそう思うの？）

（幽霊の勘です）

（……）

（……）

（当たるの？　その勘）

（以前私の勘に耳を傾けずにいた生徒がいました。その人はダンプに跳ねられた挙げ句、今では地獄の一丁目をさまよって……）

（分かった。言うとおりにしよう……）

「昨日の夜がどうかしたの？」

麻梨亜が不思議そうな顔で尋ねてくる。

「あ、えっと……昨日の夜はよく眠れた？」

「あ、うん。眠れたよ……どうしたの？　いきなりそんな事聞くなんて……」

「う、ううん。編入初日だったから、よく眠れたのかなぁって思って」

俺が言うと、麻梨亜はぷっと吹き出した。

「編入してきたのは千尋の方でしょ？」

白い歯を見せて笑う顔がとても可愛かった。俺はまたフワフワとした変な気持ちになった。

（騙されるでない！　そやつはお主が思っているような女ではないかもしれぬぞ）

突然男の声が頭に響く。ふとカーテンの方に視線を向けると、レイの横には鎧をきた定宗の姿がある。あんなにも目立つ格好をしているのに、誰一人、奴に気づいている者はいない。どうやら定宗の姿は、他の人には見えていないようだった。

（どういう意味だよ。俺が思っているような女じゃないって）

（拙者は見たのじゃ……数日前、そやつが女学院を抜け出して中年男性と密会しておるところを……そやつはのお、中年男の前で〇〇〇〇を〇〇〇おったのじゃ……）

（えっ……そんなバカな……）

俺は、定宗が放った言葉に絶句した。

１６に続く……

第十六話　念力集中ぴきぴきどかん

１６

（何を驚いているのですか？）

定宗が放った『中年男の前で〇〇〇〇を〇〇〇おったのじゃ』という言葉に絶句する俺。そんな俺にレイが尋ねた。

（だ、だって……意味分かんないし……中年男の前でマルマルマルマルをマルマルマルおったのじゃって言われても……麻梨亜は一体その中年男の前で何をしたんだい？）

俺はカーテンのところにいる定宗に向かってそう念じた。

（知りたいか？）

（うん、知りたい……昨日の夜、麻梨亜が出掛けるところを実際に見たワケだし）

（どうしても知りたいか？）

（うん。どうしても知りたい！）

（そこまで言われれば仕方あるまい。だがうまく説明できるかどうか……）

（頑張ってみてよ）

（拙者なりの説明の仕方で良いか？）

（うん。何でもいいからとにかく説明して！）

（あい分かった。では……）

そう言うと、定宗は鎧甲を着た身体でリズムを取り始めた。

（ぁ、ワン、ぁ、ツー、ぁ、ワン、ツー、スリー、フォー！　麻梨亜ちゃん、麻梨亜ちゃん、この前の夜の秘密はね、麻梨亜ちゃん、麻梨亜ちゃん、昨日の夜の秘密はね……）

何かイヤな予感がした。

（教えてあげないよ、ジャンって言ったら、部屋中に魔除けの札を貼っておくからな！）

定宗が言う前に釘をさす。とたんに定宗は静かになった。どうやら図星のようだった。

（なんか～マジムカツク～大体、教えてほしいのにその態度って何？）

ギャルのような口調で定宗が答える。麻梨亜の秘密を知るためだ。ここは敢えて下手に出ておこうと思った。秘密を知った後に魔除けの札を貼ればいいのだ。

（いやっ！　イヤやわ、最近の高校生ときたら、利用するだけ利用しておいて、あとはポイやなんて。こわっ！）

定宗が大阪のおばちゃんのような口調で語り掛けてくる。そうだった。俺が思っていることは、定宗には伝わってしまうのだった。ここはひとつ、穏便に……。

（俺が悪かった。頼む。麻梨亜を助けてあげたいんだ。麻梨亜が夜に何をしているのか、教えてください）

俺はテーブルに両手をつき、深々と頭を下げた。

「千尋？　何やってるの？」

隣にいた麻梨亜が不思議そうに尋ねてきた。

「え、えっと……ストレッチ……」

「えっ？　一人エッチ？」

麻梨亜が聞き間違えてそう言った……のならちょっとドキッとするのだが、その言葉を放ったのはやっぱり真緒だった。とりあえず真緒を無視し、もう一度『ストレッチ』とハッキリ言い直すと、麻梨亜は納得してくれたのだった。ふとカーテンのところに視線を移すと、定宗が「けけけ」と笑っているのが見えた。なんかムカつくが、今は下手に出なければならない。俺は再び念じながら、深々と頭を下げた。

（そこまでされたならば仕方がない。ただ、気を悪くしたのは確かじゃ。全部は教えぬ。あとは自分で推理するのじゃ）

定宗が高慢な口調で言った。だがここは我慢だ。

（実はのお、麻梨亜は中年男性の前で『お〇〇いを〇〇て』おったのじゃ）

肝心な所を〇で伏せる定宗。気になるように字を伏せておくのはなんとなく分かっていた。

（お〇〇いか……。多分『おっぱい』って思わせておいて、実は違うってパターンだな。となると、後ろの『〇〇て』は、『見せて』ってことになるな……。定宗は俺に、『麻梨亜は中年男の前でおっぱいを見せておったのじゃ』と言わせて、『ふふふ、お主もエロよのお』って言わせたいんだろうな……はっ、しまった！　今のも定宗に読まれてしまった！）

慌てて定宗の方を見る。奴は鼻くそをほじりながら外を眺めていた。

（大丈夫ですよ、千尋さん。幽霊である私たちが念を送って千尋さんの脳と繋がらなければ、千尋さんの思っていることを察知する事はできませんから）

（そうなの？）

（はい）

どう見ても念を送って俺と繋がっているとは思えない定宗の姿を見てホッとした。そう思っていると、定宗が急にこちらを見た。

（どうじゃ？　分かったか？）

（え、えっと……）

（ほれほれ、言ってみろ）

定宗の顔がニヤケている。これはきっと俺が先ほど考えた『お主もエロよのぉ』のパターンに違いない。でもそれにのっかり、奴の機嫌をとることで本当のことを言うかもしれない。そう思った俺は、さっき思いついたことを念じてみた。

（答えはズバリ、『麻梨亜は中年男性の前でおっぱいを見せておったのじゃ』だっ！）

俺が答えを言うと、定宗は口をあんぐりと大きく開けたまま動きを止めた。

えっ？　マジっすか？

隣にいた麻梨亜の胸の膨らみをチラリと見る。制服の下にある豊かな膨らみを想像すると、ゴクリと喉がなった。

１７へ続く……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1753x/

ようこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か

2011年10月20日22時17分発行